

# 関西大学博物館 2020年度冬季企画展 大坂画壇の絵画—日本・イギリス共同研究展

中 谷 伸 生

2020年12月14日(月)から2021年1月23日(土)まで、関西大学(図書館・東西学術研究所)が所蔵する近世近代の大坂画壇と京都画壇の作品群を展覧して、大坂の画家たちの文化交流に焦点をあてて展覧会を開催した。主催は関西大学博物館、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター(KU-ORCAS)である。大坂画壇の画家たちの作品が中心であるが、大坂の画家たちと交流した京都の画家たちの作品も一部加えて紹介した。この企画は、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター(KU-ORCAS)、ロンドン大学SOASのアンドリュー・ガーストル(Andrew Gerstle)名誉教授、大英博物館のロジーナ・バックランド(Rosina Buckland)日本部門長、アルフレッド・ハフト(Alfred Haft)学芸員、矢野明子学芸員、同じくティモシー・クラーク(Timothy Clark)大英博物館元日本部門長、大阪商業大学兼同商業史博物館の明尾圭造准教授、京都国立近代美術館の平井啓修主任研究員らと中谷伸生が協力して2018年以来積み上げてきた研究を展覧会として開催した。

ここに至るまでの日英の研究会としては、2018年7月28日に関西大学マルチメディア教室で「大坂画壇と京・大坂の文化ネットワーク」と題して、KU-ORCAS国際シンポジウムが、アンドリュー・ガーストル名誉教授や明尾圭造准教授らによって開催された。2019年4月10日にロンドン大学(イギリス)で、「共作による創造：京一大坂の美術とサロン文化1750—1900」と題して研究集会在開かれ、中谷伸生他の研究発表が行われた。2019年8月2日に関西大学・以文館セミナースペースで「大坂画壇と京の文化をめぐる研究と展覧会企画」と題して、アンドリュー・ガーストル名誉教授を招いて東西学術研究所国際シンポジウムを開催した。

今回の展覧会は、こうした研究集会の蓄積の一端を披露するもので、関西大学博物館展を第1弾として、2022年春には京都国立近代美術館

で第2弾を、その後もロンドンの大英博物館日本美術展示場で第3弾の展覧会を予定(未定)している。大坂画壇を中心とする日本の絵画を世界に紹介する絶好の機会だと思われる。なお、大英博物館には数万点に及ぶ日本美術が収蔵されているが、その中で大坂(阪)画壇の作品の占める割合はきわめて高い。

展示内容を紹介すると、江戸時代後期の大坂では文人画が盛んになり、その流れは京都を圧倒する勢いであった。明治36年(1903)に金港堂から刊行された藤岡作太郎著『近世絵画史』においては、江戸時代後期は大坂に文人画(南画)の中心地が移ったことが詳述されており、大坂の文人画家たちの顕彰がなされたが、その後の多くの美術史家たちは、東京と京都の画家たちにしか目を向けず、大坂の文人画家たちを切り捨ててきたとあってよい。大坂では知の巨人と呼ばれる木村兼葎堂(1736—1802)が活動し、その周辺には、《山水図》を描いた岡田米山人(1744—1820)、《客中詩画卷》の岡田半江(1782—1846)をはじめ、《巖上揮毫・画龍点睛図》(双幅)を描いた福原五岳(1730—1799)や、《掌中延寿》という画帖を制作した濱田杏堂(1766—1814)、兼葎堂の遠縁にあたる三好正慶尼(1729—1806)らの作品が見られるが、正慶尼の《大原女図》は、素人風の形態把握を見せる非常に珍しい絵画である。また、儒者の十時梅屋(1749—1804)が享和3年(1803)に描いた《五柳先生図》(陶淵明図)の豪快な作風も興味深く、学者でもあった梅屋が重厚な思想を踏まえて絵画制作に励んだことが判明する。

近代に入っても、アメリカ人に人気の高い上品な文人画(南画)で知られる日根對山(1813—1869)らが注目すべき活動を展開した。若い世代における文人趣味の衰退が気になるが、21世紀は、こうした大坂の豊かな文人趣味を再評価すべき必要があるだろう。なお、この展覧会では浦上春琴(1779—1846)らの大坂以外の文人画家たちの未公開作品をも展覧した。

江戸時代の写生派について述べれば、京都の円山応挙（1733-1795）と呉春（1752-1811）らの活躍で、多くの写生派の画家たちが生まれたが、それらの中に大坂の写生派の画家たちがいた。彼らの多くは「大坂四条派」と呼ばれてきたが、呉春に因んだ京都の街「四条」という言葉を大坂の画家たちに冠してよいのかどうか、今、その検証が始まりつつある。本展では暫定的に「大坂写生派」として紹介したが、大坂らしいさっぱりとした《親子笥図》を描いた西山芳園（1804-1867）、大阪の名所を題材にした《中の島遊船図》の西山完瑛（1834-1905）、また、大幅《七種草花図》の長山孔寅（1765-1849）らを紹介している。

さらに、幕末明治期では森一鳳（1798-1871）や久保田桃水（1841-1911）らの名所絵を展観した。これら大坂の写生派は、明治期に入り、西洋絵画の手法を採り入れた東京や京都の日本画の後塵を拝するようになり、守旧派として忘れられたが、西洋化（近代化）の終焉とともに、今、再評価の兆しが見えてきたのではなかろうか。

加えて、大坂（阪）では、さまざまな個性的な画家たちが活動し、流派に捉われない種々様々な画家たちを輩出した。兼葭堂の周辺で活動した戯画作者の耳鳥齋（1751以前-1802/3）はその代表である。今回は「降る金銀を扇にてとる」と言われ、扇面画制作で有名な戯画作者の耳鳥齋による扇面画2点（《顔見世之図》と《正連寺水燈》）を紹介した。また、中国絵画に憧れて奇矯な絵画を描いた林閻苑（生没年不詳）については、中国の仙人を扱った《蜆子和尚図》も見逃せない。



さらに、近代に入っては大阪の風俗を描いて、戯画的・マンガ的な作風を確立した菅楯彦（1878-1963）は、21世紀の絵画世界を予言したといってもよい。面と線を独自の形態処理を用いて描いた楯彦の戯画風絵画は、もっと高く評価されねばならないが、世の研究者や批評家の牢固とした偏見が蔓延して、今なお半ば不問に付されたままである。また、大阪の女性を描いた北野恒富（1880-1947）は、東京の鏑木清方、京都の上村松園と並ぶ近代日本画の3大美人画家だといって間違いないが、近年では、日本に加えて欧米での評価が高くなりつつあり、多くの作品が海外の美術館やコレクターに購入される状況が続いている。加えて、島成園（1892-1970）の評価も徐々に上がりつつある。文人画（南画）では矢野橋村（1890-1965）が活動し、豪快で奇抜な絵画を制作した江中無牛（生没年不詳）も大正期前後に活動した注目すべき画家である。さらに、野口小蘗（1847-1917）による《百虫図》も珍しい昆虫図だといってもよい。これら大坂（阪）の画家に加えて、大阪の弟子を多く抱えた京都の岡本豊彦（1773-1845）と松村景文（1779-1843）らの未公開作品も本展で紹介した。

最後に、数点のみの展示ではあるが、陶磁器と漆器に絵付を行った菅楯彦と上田耕甫（1860-1944）の作品も展観し、彼らの幅広い活動の一端を確認する資料とした。展示作品は、上田耕甫絵付京焼茶碗《俵牛図》（昭和時代）、同じく上田耕甫絵付鶴蒔絵棗《花卉図》（昭和時代）、そして、菅楯彦絵付京焼茶碗《欄宜荒木田守武像》（昭和時代）である。

以上、展覧会に出品した絵画類は、関西大学博物館のみの展示で、2022年春に開催される京都国立近代美術館での「大坂画壇と京のサロン」（仮称）展には、本展で展示された作品は出品されない。すべて関西大学図書館と東西学術研究所が所蔵する別の作品となる。

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター 研究員